



社会福祉法人聖隸福祉事業団保健事業部総合企画室のメンバー



医療経営士と専門職が協働し 地域のニーズに合致した 新たな予防医療を展開

— 社会福祉法人聖隸福祉事業団 保健事業部 総合企画室 —

「隣人愛」を基本理念とし、静岡県内を中心に直営で4つの健診施設を開設する社会福祉法人聖隸福祉事業団保健事業部では2020年6月、総合企画室を設置した。同室のメンバー3人のうち2人は医療経営士の資格取得者。コロナ禍で医療のあり方が変わるなか、保健事業を通じてどのように地域に貢献するかを常に考え、実行している。



撮影=望月やすこ

「医療経営士」行動指針七か条

- 一、社会的正義を担う医療人としての自覚を持とう
- 一、情報の受発信に常に貪欲・鋭敏になろう
- 一、研究会・勉強会を鍛えの場とし、現場主義を重んじよう
- 一、強い経営基盤を確立し、安心・安全な医療を持続的に提供しよう
- 一、高き理想を掲げる夢追い人となろう
- 一、不断の努力と工夫を惜しまことなく、徹底した行動力と実践力を身につけよう
- 一、地域社会の発展につながる活動に取り組もう



- 【改革推進における医療経営士の役割】
1. 解決すべき問題・課題の整理
 2. 経営数値による分析(診断技術の駆使)
 3. 改革プランの策定(P D C Aサイクル)
 4. 役割分担(6W3Hの法則)
 5. スケジューリング

藤田真人さん 保健事業部 事業管理部長



時代の変化に即した
多様な活動に期待
実践を通じて

医療経営士の担う役割そのものである経営課題を解決する能力を有し、実践的な経営能力をまさに現場で活かしているのが池田さんの所属する総合企画室です。

今後の医療あり方が大きく変わり経営的にも難しい舵取りを迫られるなか、私たち予防分野も同じ。うに時代に即した大きな変化が必要となってきます。それは、ゲノムであったり、AI、PHRであったり高齢者の保健事業もそうでしょう。時代が変化するように、地域のニーズも刻々と変化していきます。それをキャッチして事業化し、経営的にも、そして社

会にも寄与していく、私たちの事業において医療経営者たる立場から、常に社会貢献活動を実施してまいります。

そういう意味では、現在も他業種とコラボレーションをして“ゼロからイチ”をつくり上げる事業を手がけてもらっているので、今後の活動には期待しかありません。

自ら考え、行動する人材として、実践でさらに知識に磨きをかけてもらいたいと思っています。

社会福祉法人聖隸福祉事業団保健事業部総合企画室のメンバー			
池田 孝行 さん	医療経営士2級	総合企画室室長 聖隸予防検診センター事務長	
松村 和樹 さん	医療経営士3級	総合企画室企画課係長	
大橋 慧子 さん	-	保健師	

健康経営の推進の大きく3つに取り組んできた。このうち健康経営については、その必要性に対する理解が徐々に浸透してきているものの、「何から始めたらよいかわからぬ」担当する人材がいないなどの声が寄せられているという。

域の健康増進に努めている。

**「コロナを踏まえた
新たな価値創出を目指す**

新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、特に2020年前半には健診や人間ドックの受診を控え

二〇二〇年を距まぬ
新たな価値創出を目指す

「プロジェクト」事業にかかわり、MCI（軽度認知障害）の人を対象としたサプリメントの治験にもかかわるなど、幅広い活動を展開している。

「産業保健師がいない企業・組織では、健康課題の把握や取り組み評価へのニーズが高いと感じています。当事業部にはデータが蓄積されていますので、それらを活用しながら健康経営の実践を支援していくけれどと思っています」と大橋さんは意欲的だ。医療経営士と

か、行政や大学、地域企業といつたステークホルダーとの連携による共同事業を進めるなど、新たな取り組みも行っている。

事業の経営を担う人材がおらず、どのようにマーケットを広げていかのかわからないといった声を耳にします。医療経営士は医療経営を体系的に学ぶことができるのでも、「健診分野の戦略を考える人材を育てるうえでも有効です」と語る池田さん。現在、総合企画室の統括役として将来に向けた保健事業部のビジョン策定の中心を担い、将来、同事業部がどうあるべきかの検討を重ねている。また、聖隸予防検診センターの事務長も兼任。職員エンゲージメントの向

推進していきたいと考えています

また、係長を務める松村さんは同室の役割を、①今、ないものをつくり上げる(ゼロからイチを生み出す)、②知を財に変換する――の2つであると説明する。

同室のメンバーのうち、池田さんと松村さんの2人は医療経営士の資格を取得している。

「医療経営士実践研究講座」で講師を務めていますが、聴講される多くの経営幹部の方から、保健

組み合わせることで最適化された
新たな価値を創出したいと考えて
います」と言う。
「『経営』とは、『継承』（継続して
栄える）でもあると考えています。
その実現には、常にニーズをとら
え、自組織がどのように貢献でき
るかを、地域とのつながりのなか
で考えていくことが求められてい
ます。医療経営士の知識を活かし
つつ、総合企画室が一丸となつて、
医療にとどまらずより広いフィー
ルドで活動していきたいと思つて
います」と話す池田さん。新たな
価値の創出に向けたこれから挑
戦に注目したい。

ICTによる遠隔面談の推進や重症化予防のプログラム作成のほか、浜松市が中心となつて推進している官民連携の「浜松ウエルネ

一方、松村さんは聖隸浜松病院の経営企画室時代に医療経管士を取得。院長など経営幹部とコミュニケーションをとる機会が多く、医療情勢や制度・政策への理解が不可欠だと実感したことから、取得を目指した。「勉強することで医療界全体に関する知識が身につき、経営層とのやり取りもスムーズになりました」と振り返る。

保健事業部に異動後は主に健診の営業を担当していたが、総合企画室設立に伴い、医療経管士資格を有し経営企画の経験もあったことなどから抜擢された。現在は、



医療経営士と保健師がタッグを組み、事業を推進している



A portrait photograph of Dr. Katsuaki Watanabe, a middle-aged man with dark hair and glasses, wearing a suit and tie.

A portrait of Toshiyuki Kondo, a man with dark hair, wearing a dark suit, white shirt, and patterned tie. He is looking slightly to his left with a neutral expression. A small circular logo is visible on his left lapel.

1930年、結核に苦しむ人々の世話を原点として事業を開始した聖隸福祉事業団。「保健」「医療」「福祉」「介護」の4事業を開拓しており、このうち結核の予防対策としてスタートした保健事業は、現在では健康診断・人間ドック事業による病気の早期発見・早期治療のみならず、健康づくり支援や健康経営に取り組む企業に向けた支援事業などに発展している。

保健事業部では2020年6月、将来を見据え総合企画室を設

置した。メンバーは事務職の池田孝行さんと松村和樹さん、保健師の大橋慧子さんの3人だ。室長の池田さんは次のように話す。

「コロナ禍で医療のあり方が大きく変わり、予防分野においても先が読みにくい状況です。保健事業を通じて地域に貢献するために何ができるのか、将来に向けて何をすべきかを考え立案する部署として、総合企画室の設置を提案しました。事務職と専門職がタッグを組み、スピード感をもつて事業を

推進していきたいと考えています

また、係長を務める松村さんは同室の役割を、①今、ないものをつくり上げる（ゼロからイチを生み出す）、②知を財に変換する――の2つであると説明する。

同室のメンバーのうち、池田さんと松村さんの2人は医療経営士の資格を取得している。

『医療経営士実践研究講座』で講師を務めていますが、聴講される多くの経営幹部の方から、保健